



令和4年度

鹿児島県の教育

10月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長副部長

鹿児島市立清水中学校長
中山 恭平

「継ぐ想い」^{つな}

先日、故郷の十五夜豊年祭りの映像が送られてきた。三年ぶりの開催ということもあって、喜びと笑顔があふれる写真ばかりである。

私の子どもの頃は、多くの若者が参加し、お年寄りも、集落の公民館で正装して待ち構えているものだった。三年ぶりに開催されたお祭りは、私の子どもの時代とは随分違っていた。まわしをつける若者はほんのわずかで、古希を迎えた私の兄たちがまわしをつけ、懸命に祭りを盛り上げていた。故郷のために何とか伝統行事を守り続けていこうと工夫や努力をし、そして、何よりそれを心の底から楽しんでいる人々の姿に心を動かされた。

新型コロナウイルス感染症終息の先行きが見通せない中、今年も中止となった地域行事やイベントは少なくない。一方で、三年ぶりに大きな花火大会や祭りなどが開催された。感染症対策や参加者の確保など多くの課題が話し合われたはずである。そして、いつもの準備作業よりもはるかに時間や費用がかかったことは想像に難くない。なぜ、開催することにしたのだろうか。

それは、行事開催の目的や意義、伝統を引き継ぎたいという人々の思いが、コロナ禍を乗り越えるエネルギーになったのではないかと思うのである。

学校では、体育大会や文化祭など多くの行事の実施に向け、感染症対策・実施時間・方法・参加人数等々多くのことが議論された。もちろん、この三年コロナに翻弄されて実施できない学校行事等もいっぱいあった。しかし、もう一度腰を据えて、教育目標達成や子どもたちの成長のために何が大切であるかという基本に立ち返る必要があると痛感する。

ある登山家は、「登山で前回と同じはあり得ず、経験に頼るのがいかに危険か。人は経験を積みたがりですが、それが逆に身を危険にさらすことにもなる。だから僕は経験を並べ、足りない部分を想像する。」と言っている。我々校長も、これまでの学校経営の経験を積み重ねるだけでなく、その経験を並べて、見てみることも必要な気がする。そのことが、新しい学校経営を模索する上でも、新たな教育課題に向き合うためにも大切な視点ではないだろうか。

私たちは七七一人の仲間がいる。同じ立場である校長同士の何気ない雑談の中で課題解決のヒントを得ることも多々ある。まだ、直接会って話すことは憚られる状況ではあるが、今できる方法で交流していこうではないか。いつかきつと、膝を突き合わせて語り合える日が来ることを楽しみにしながら…。

令和4(2022)年 10月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

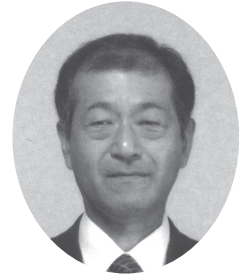
(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	14
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	12		



子どもたちの夢をはぐくみ、 未来を切り拓くために

スターランドAIRA館長 吉 永 敬一郎

略 歴

一九八五年三月 鹿児島大学理学部地学科卒業
 一九八五年四月 西之表市立榕城中学校に赴任
 以後、県内一〇か所の中学校で勤務
 二〇二一年三月 鹿児島市立吉野東中学校長を
 最後に退職
 二〇二二年四月〜現職

現職に就くまでの三十六年間、十か所の中学校で勤務してきました。定年退職後にはせっかくの人生だから教職とは全く違うこともやってみたいと思いつながらも、現職中は目の前の課題をこなすのが精一杯の毎日でした。卒業式も近づいてきた頃に現在の職場のお話をいただき、毎日やりがいをもって楽しく勤務しています。

私が勤務している始良市立天文台「スターランドAIRA」は、大型望遠鏡とプラネタリウムを有する県内唯一の公開型天文台です。家族連れ、友だち同士やカップル、あるいは一人でふらっと訪れる方等、さまざまな形で望遠鏡やプラネタリウムを楽しんでいらつしゃいます。学校の校外学習や遠足でも利用していただいています。

プラネタリウムを見る、あるいは望遠鏡を覗くという体験は、人生の中ではたいへん短い時間ではありますが、その後の考え方や社会の見方・とらえ方に大きく影響を与えるような気がします。天体を眺めることで自然を感じ、地球や生き物など万物を大切に扱うこと、ひいては自分自身を大切にすることにつながるのではないのでしょうか。小さな接眼レンズを覗くこ

とが一人一人の視野を大きく広げることにつながると思っています。

子どもたちが生きていく時代には、私たちの時代にはなかった、あるいは気づいていなかったような課題が山積しています。私は、これらの困難が立ちはだかつた時に、それまでのさまざまな見聞や体験が必ず役立つと確信しています。これからの子どもたちに感動を与え、科学的な視点を育成する天文台のあり方を考え、工夫していきます。そして、大人の方々に対しては、心のリフレッシュや癒やしのひとときを提供していければと考えています。

今年、世界中に大きな影響を与える戦争が起こつてしまいました。私たちとほぼ同世代である国のリーダーが、今の時代に戦争という方法を選んだということが本当に残念であると同時に、次の世代にたいへん申し訳なく感じています。

教育の世界においてはどうか。次の世代が情熱をもって教育に打ち込めるよう、舞台を整える役割は、これまでのあり方を変革できる立場の方々が間違ふことなく担っていかねばなりません。若い人たちがやりがいをも

って教師を務められる環境づくりを、そして子どもたちの夢をはぐくみ、未来を切り拓く教育の構築を、教育界のリーダーである皆様にと託したいと思っています。不都合なことからは視線をそらす正常性バイアスが働きがちですが、慣例や同調圧力に屈することなく、より良い方向に変えていくことが大切だと考えます。

イタリアの天文学者ガリレオ・ガリレイが望遠鏡を覗いてさまざまな発見をしたのは、今から約四百年前のことです。当時、絶対的な考え方であった天動説を変革するために、提案方法を工夫し、抵抗する強大な力に屈することなく信念を貫き通したガリレオは、新たな時代の先駆けとなりました。時代を切り拓く戦略の参考になるのではないのでしょうか。

現在の職場は月・火曜日が休みです。休日に学校の近くを通ると、子どもたちの楽しそうな声が響いています。とてもうきうきした気持ちになると同時に、がんばっていらつしゃる先生方にエールを送りたくくなります。今後の教育界のさらなる発展と、先生方と子どもたちの飛躍、そしてその先にある全世界の幸福と平和を心から願っています。



体験活動の重要性を考える

松山小(南) 田原 健 児

一 はじめに

小学校の校長として本年度赴任し、これまで中学校しか経験のなかった者として、中学校と小学校の違いを強く感じている。特に小学校では、教育課程の中に、まだ体験活動が多く残されている。中学校では行事の精選やコロナ禍、教師の働き方改革の下に体験活動は減らされたり、削られたりした。子供にとって体験活動は大変意義のあるものと以前から言われてきたことであるが、現在の状況はそれに逆行しているように思える。

そこで、体験活動の重要性について考えてみたい。

二 青少年の体験活動に関する現状

文部科学省の「青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会」における論点のまとめから

(一) 青少年の生活環境について

子供たちの生活時間の内訳をみると近年学校で過ごす時間は増えているが、放課後の時間については、多くの学年で減少し、屋内外での遊びの時間や家族や友人と過ごす

時間が一・二割程度となり、学校以外で青少年が体験活動を行うことができる時間自体が短い状況にある。

(二) 学校における体験活動について

各学校において、多様な取組が展開されている。一方で、青少年の自立心、連帯感・仲間意識、優しさ・思いやり、リーダーシップを育むことに関し、より効果が高い長期宿泊型の体験活動については、保護者、学校、教員等の負担も一因となり、実施している学校の割合は必ずしも高くない状況である。

このように、現在の子供たちは体験活動の機会が少なく、そのことを補完する機関としての学校の果たす役割はますます重要となってきた。

三 体験活動の効果について

文部科学省の令和二年度青少年の体験活動に関する調査研究結果報告から

(一) 小学生の頃に体験活動や読書、お手伝いを多くしていた子供は、その後、高校生の

時に自尊心や外向性、精神的な回復力と

いった項目の得点が高くなる傾向が見られる。

(二) 小学生の頃に異年齢の人とよく遊んだり自然の場所や空き地・路地などでよく遊んだりした経験のある高校生も同様の傾向が見られる。

(三) 経験した内容によって影響が見られる意識や時期が異なることから、一つの経験だけでなく、多様な経験をすることが必要である。

これらの結果から、小学校時代に多様な体験活動を経験させることは、高校生以後の人格形成に大きく影響してることが伺える。

したがって、これからの学校は、意図的に子供たちが多様な体験活動ができる場を設定し、環境づくりに努めていくことが求められる。

四 おわりに

体験活動は、知識を知恵へ変える営みといわれる。これからの二十一世紀を子供たちが生き抜く力を身に付けるためにも体験活動は必要である。現在、コロナ禍で集団での活動がやりにくい状況であるが、各学校が工夫しながら多様な体験活動を行っていくべきである。普段の教室内の活動では見せない子供の姿を見ることが出来るのも体験活動の良さだと考える。今後とも各学校で充実した体験活動が行われ、子供たちの人格形成に良い影響を与えていくことを期待している。



全職員でのハイブリッド走行

亀津小(大) 池田 昌弘

一 はじめに

校長一年目。初心者マークを付けながら日々学校を走り回っている。この五か月を振り返ると、考えて行動するというより、走りながら考えるような毎日であった。学校のトップとして、全職員にとつての働き甲斐のある職場づくりについて考えていることを述べる。

二 円滑な学校経営

働き甲斐のある職場とは、職員一人一人の個性や能力が認められ、協働的・支持的な風土のもと仕事ができたり、学校運営についても主体的に関わったりするような職場である。

このような環境づくりを進めるイメージを自動車でたとえると、ハイブリッド車のような動力での学校経営である。ハイブリッド車は、従来のエンジン部分とモーター(電気)部分との動力を切り替えて走行する地球環境にやさしい車である。私は、エンジン部分が管理職、モーター部分が職員と捉え、それをうまく組み合わせながら、学校経営を進めている。

三 エンジン部分の動力源強化・伝達

管理職がまずは心身ともに健康であり、エンジン全開で働けるようにすることが大事である。そのためには、教頭の長時間勤務が課題である。本校でも、定時退庁日などの設定をしているが、教頭の業務改善が大きく前進しているとは言い難い。少しでも教頭の負担を軽減するため、管理職の分担制を敷き、平日二日間の戸締りと日曜日の確認を校長がすることにした。そのことで、前年度比(四ヶ月分)の時間外勤務を約二十五時間短縮することができるとともに、早目に退庁する教頭の姿を職員が見ることに、教頭のイメージも少し変えることができた。

また、校長の学校経営ビジョンを効率的かつ明確にするため、グラウンドデザインだけでなく、なるべく数値化した自己申告書を作成し、教頭に開示しながら力を合わせて進めるようにしている。

管理職の動力をうまく職員につなげるためには、普段からの人間関係づくりが大切である。ある大先輩からの「職員を家族と違って仕事をしていく」という言葉に感銘を受けた。普段の言葉かけだけでなく、学期終わりや誕

生日の折に、メッセージカードを送るなどして、職員との関係性や「チーム亀津」の同僚性なども高めている。

四 モーター部分の動力源活性化

職員一人一人の様々な建設的な提案をどのように受け止め、それに対し管理職としてどのように対応するかが大事である。本校においても、当初計画にはなかったが、職員から、「欠席の連絡をメールでできるようにしたらよいのでは」「校務支援ソフト、業務改善の研修を追加して先生方が使えるようにしたらよいのでは」等々、業務改善に繋がる提案がある。中には、自分の校務分掌以外のことについて提案する職員もいる。この職員たちの熱い思いにしっかりと耳を傾け、管理職も一緒に考える姿勢を常にもつことを心がけている。管理職の向き合い方が、職員のやる気を引き出すとともに、職場の働き方を変えるための原動力になり、日々の業務の問題点について改善策を提案する集団へと変えていくと思う。

五 おわりに

山本五十六の言葉が脳裏に浮かぶ「やってみせ、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ。話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿に感謝で、見守って、信頼せねば、人は実らず。」

職員全員が学校を動かす重要な動力源である。職員一人一人の能力や可能性を信じて、そして最大限に生かしながら、今後もハイブリッド走行で進んでいく。



自分に自信をもち

粘り強く前向きに取り組める

子どもたちの姿を目指して

霧島小(始伊) 名 越 秀 人

一 はじめに

本校区は、北に仰ぐ霊峰高千穂峰の山麓に抱かれて、霧島神宮を背景に、南に錦江湾・桜島を望む標高三五〇mから四五〇mの高台に位置している。約五百戸が散在する農村地帯で、展望、風景、環境ともに恵まれた中で、保護者や地域住民が温かく学校を支えている。霧島連山を背にしているため四季を通じて雨が多めで、また夏の暑さはしのぎやすいものの、冬の寒さは厳しい。そんな環境の中で子どもたちは毎日元気に学校生活を送っている。

二 学校経営の基本方針

本校は「自分と友達の心や命を大切にすること。日本一の学校」と、基本方針を掲げている。これは、他者との比較ではなく、子どもたちが前向きに真にやり切ったそのような姿になった時に、子どもたち自身が自信をもって言えるようになるのではないかと考えている。学校全体でその姿を目指して日々様々な活動に取り組んでいる。

三 令和四年度学校経営五つの柱

本校の子どもたちは、全体的に真面目で明るい雰囲気でも落ち着きがある。しかし、自己肯定感が低い傾向があり、自信をもって発表

したり行動したりすることをやや苦手にしていく実態がここ数年の課題となっている。そこで、子どもたちが自分に自信をもち、多くのことに粘り強く前向きに取り組めるように、①ひとを大切にすること(豊かな心の育成)、②負けない体(健康でたくましい体や心の育成)、③物事を考える力(確かな学力の向上)、④霧小を味わう活動(特色ある教育活動の推進)、⑤学校ブランド力(信頼される学校づくり)の五つの柱を掲げ、この五つを有機的につながりをもたせ、学校経営を推進している。

このような学校経営を推進し、多くの教育活動を展開していく中では、「業務改善」を抜きに考えることはできない。本校も、業務の「質」と「量」の両面から改善を模索している。これからも「不易」と「流行」を見極めながら、子どもたちが「霧島小で学んで良かった」と思える学校になるように学校経営を進めていく。

四 インターネットとタブレットの活用

五つの柱の中で、昨年度から特に具体的なかつ重点的に取り組んでいる一つに、道具としてのインターネットとタブレットの活用がある。

本校は、五八人(令和四年四月六日現在)の児童が在籍している。現在は、全ての学年が単式学級であるが、次年度からは一部の学年で複式学級となる。在籍児童が少ないこともあり、多様な考えや意見が出にくい実態がある。以前より小中連携・小小連携の観点からも霧島地区の三小学校(大田、永水、霧島)では、合同学習(六年生)の機会を設けて、多くの考えや意見に触れられるようにしている。

しかし、限定的な合同学習の機会では、広がりが十分とは言えない。そこで、令和三年度に整備された一人一台のタブレット端末を学級の教科学習での活用はもちろん、他校との教科学習での活動に活用している。例えば、国語科の学習の際、各学校で学習を進めた後、学習したことを活用して、自分たちの考えをまとめ表現し、インターネット(Google Classroom)を通して相互に考えや意見を交流する活動を展開している。こうすること、他校であっても、時間的・空間的な制限を解消でき、更には自校だけの活動よりも子どもたちの考えや意見が広がり、自信ある発表・行動につながっている。

五 おわりに

本校に着任前に大病を患い、自分自身が大変苦労し、周りの人にも多大な迷惑をかけた経験から、何をするにしても、まずは「健康・命」を大切にしなければ、自分自身に自信をもって自分の夢や目標に向かって取り組めないと考え、学校経営の基本方針にしている。これからも子どもたちや保護者、教職員に対して繰り返し伝え、学校経営の基本方針を浸透させたい。



郷土の自然・伝統・文化を生かした活動を

知名中(大) 梅田 俊 治

一 はじめに

本校は、沖永良部島の南部に位置し、近くには、「日本鍾乳洞九選」にも数えられる昇竜洞や奇岩群で有名なウジジ浜などがあり、豊かな自然に恵まれた学校である。

地域の中心校としての役割が大きく、平成十九年に新校舎落成と創立五十周年の式典を行い、可能な限りの場所に空調を設置していただき、生徒が休み時間等に友達と交流が深められるようなスペースを設けるなど、すばらしい環境にするべく地域あげて取り組んでいただいた。

現在生徒数百十二名、学級数六学級で、学校・PTA活動を推進している。

二 学校教育目標

本校の学校教育目標は、「ともに自己実現に精いっぱい努力する生徒の育成」一人一人の人權を尊重する教育の推進」である。

この目標達成のために、教職員の資質向上、特色ある教育活動、開かれた学校などを重点事項とし学校経営に取り組んでいる。

三 本校の取組

(一) 教職員の資質向上

沖永良部では秋季教育研究大会が毎年開催される。その大会に向け、各学校では研修計画の中に「秋研テーマ・部会テーマ」の研修を組み入れ研修を深めている。

また、大島地区の取組として年間を通して「一人一研」として、学力向上の目的で一人一回の研究授業を行っている。

(二) 特色ある教育活動

特色ある教育活動の一つにジャガイモ栽培がある。沖永良部は全国一早い国産ジャガイモを生産している。そのジャガイモの植え付けから収穫までを体験している。この体験を通して基幹作物について知り、食を支える方々の苦労や思いを理解させている。

次に例年、宿泊学習の中で、ケイビング体験(洞窟探検)を実施している。沖永良部では当たり前、いつでも見られると思う風景でも、全国的に見てみると、価値の高

いすばらしい自然で、その自然を海と陸、そして地下から体験し、環境保全や沖永良部の観光振興の取組につなげる学習である。

(三) 開かれた学校

地域に根ざした教育ということで積極的に地域の人材の活用や地域行事への参加を行っている。

前出したジャガイモ栽培やケイビング体験もそうであるが、地域の方々の協力がないとできない。地域を散策しながら歴史や風習を学んだり、その他に、島唄や島口の学習も取り入れている。文化祭で島唄・島口を使った創作劇や三線を演奏したりもする。また、体育大会では伝統の踊りを披露するなどしている。

四 おわりに

島唄・島口は親世代でも聞き取りはできても話せなくなってきた。高齢化が進み、傳承していくことが難しくなりつつある。

また現在、コロナ禍で地域の活動や学校の教育活動も延期や中止、規模縮小といった中で、学校としてどのようにしたら実施できるか模索している。地域の中の学校として、歴史や文化を理解させるとともに、地域の人に誇りを持ち、人を大切にし、社会でもたくましく生き抜いていく生徒を育成するような学校経営を推進していきたい。



地域と伝統とつながり、児童一人一人の夢実現を目指した教育活動

大口小(始伊) 垣内 秀一郎

一 はじめに

本校は、県北西部に位置し、熊本県・宮崎県と接する伊佐・大口地区のほぼ中心部にあり、政治・経済・文化の中心地で交通の要衝でもあります。本年度、創立百五十周年を迎え、これまで一万人を超える卒業生を社会に送り出してきました。様々な分野での卒業生の活躍は在校生の誇りとなっています。現在、全校児童四百四十五名で、市内では最も人数の多い学校でもあります。

学校のすぐ裏には、「しろやま」と呼ばれる大口城の跡地があり、歴史的にも貴重な場所となっています。

二 夢実現のための取組

本校では、学校教育目標を「夢実現に向けて、基礎的な力を確実に身につけ、未知なる可能性を発見できる子どもを育てる」と設定しています。学校は、「子どもたちの夢実現のために準備をする場である」ということを教職員一人一人が意識し、「子ども」を主語とした教育活動を行っています。

(一) 児童が主体の人権教育への取組

年に三回ある人権週間では、毎回「合言葉」を設定しており、教職員、子供たちが全員で共有して取り組んでいます。

第一回 自分のことを好きになろう。

第二回 友だちのことを知ろう。

第三回 自分の気持ちを伝えよう。

具体的には、「言われてうれしい言葉」を花びらとして作った「ひまわりの花」を全学級に掲示したり、「学級人権宣言」を全ての学級で話し合ったりするなど、一人一人が「人権」について自分のこととして考えを深められるように様々な取組を行っています。

また、委員会活動では、人権委員会の児童が人権集会の運営を行い、手話を歌で紹介したり、日々のあいさつ運動を行ったりするなど、児童同士が話し合い、活動を決定し、主体的な活動を行っています。

(二) 異学年による縦割清掃

一年生から六年生の縦割りグループを編成し、異学年での清掃活動を行っています。上級生は掃除の仕方、片付け方、反省までを下級生の手本となり、リーダーシップを発揮しています。下級生は先輩から学びながら、力を合わせて校内清掃に取り組んでいます。

(三) 地域の自然を活かした体験活動

五年生では、近くの伊佐農林高校生ととも

に稲作体験をしています。苗植えから収穫までを高校生から直接指導してもらっています。収穫したお米を使って、地区コミュニティ協議会の方と一緒に、めの餅作りをするなど、「鹿児島の米どころ」ならではの活動を行っています。

四年生では、市内のカヌー協会の協力をいただき、カヌーの操舵方法や着衣水泳について学んでいます。川内川が身近にある地域環境の中で、水の楽しさ、そして怖さについて正しく学ぶ機会となっています。来年の鹿児島国体においては、本市がカヌー競技の開催地でもあります。

(四) つなぐりを大切にしたい夢実現のためのキャリア教育の充実

本校は今年度、百五十周年という節目の年を迎えました。大口小学校を支えてくださっている方々の思いが、一つ一つ形になりつつあります。また、様々な分野で活躍する卒業生による出前授業やビデオメッセージを通して、「働くことの魅力」や「やりがい」を感じとり、自分なりの「夢」につながるヒントを得る機会となることを願っています。

三 おわりに

豊かな自然環境の中で、伸び伸びと子どもらしく活動し、学校や保護者はもちろん、卒業生や地域の方々から見守られながら学ぶことで、ふるさとを誇りに思う心を育んでほしいと思います。そして、自分の未知なる可能性を信じて「夢実現」に向かって力強く歩んでいく子どもの育成に努めてまいります。



山椒は小粒でもぴりりと辛い

鹿児島東高 森川 敏 美

一 はじめに

本校は、桜島をのぞむ高台に位置し、今年で七十四年目を迎える。農芸高校、園芸高校、農業高校と変遷し、昭和四十四年に校名を鹿児島東高校と改称し今に至る。これまで、園芸科、国際教養科などと学科再編され、現在は学年二クラスの普通科のみ的高校となっている。平成二十四年からは敷地内に鹿児島高等特別支援学校が併設開校し、学校行事等と合同で実施している。生徒たちの生き生きとした個別最適な学びについて紹介する。

二 子どもが輝く取組

(一) ことばでつながる

国際交流は、国際教養科が設置されていた頃に遡る。本校では二次次から文理・総合・教養の三コース制をとり、同時に第二外国語として韓国語・中国語を選択して学べる教育課程を編成している。現在、韓国(金海伽耶(キメカヤ)高校、中国の匯文(カイブン)中学校、タイのナワミン学校の三校と姉妹校盟約を結び、これらの学校への短期派遣制度を設けている。毎年本校の生徒が異文化を体験し、さらに姉妹校の生徒

が本校を訪れる相互交流を行ってきた。しかし、コロナ禍にあつては相互訪問ができないため、オンライン交流を予定している。

七月に全国総文祭プレ大会国際交流部門で、韓国の高陽(コヤン)芸術高校とオンライン交流が行われたが、その中心となったのが「CCC (Cross Cultural Club 国際交流部)」の生徒たちである。交流会では相手校の生徒が驚くほどの韓国語を披露した。一方、中国語に関しても、県日中友好協会主催の中国語スピーチコンテストで優勝したり、朗読部門で上位入賞したりするなど、着実に力を高めており、進路選択にも結びついている。昨年度は中国駐福岡総領事館ともオンラインで交流を行った。韓国語・中国語については入学前から関心を寄せている生徒が多く、二年間という短期間で吸収した力を十二分に活かしている。

(二) 心でつながる

隣接する鹿児島高等特別支援学校と体育館や大ゼミナル室などを共用し学習している。九月には二年ぶりに合同体育祭を実施し、両校生がグラウンドいっぱい躍動

(三) 地域でつながる

平成十八年度に鹿児島市社会福祉協議会からボランティア推進校の指定を受け、さまざまな活動を行っている。吉野地区ではNPO法人と連携し、明治日本の産業革命遺産に登録された旧集成館の世界遺産観光ガイドボランティアを行った。この他の関連施設(関吉の疎水溝、寺山炭窯跡など)は、本校HPを訪ねていただきたい。また、坂元地区の「せばる隼人舞」にはダンス部を中心に参加している。郷土の伝統継承のため、地元の指導を仰ぎながら練習を重ね、十一月二十三日の本番を迎えることとなる。

三 おわりに

生徒たちには、Chance1(今の瞬間を) Challenge1(いつか挑戦しよう) Change1(変わることは成長だ)と呼びかけ、今年度は「チャレンジ!高みへのステップ」をキャッチフレーズとし、毎日の教育活動に取り組んでいる。鹿児島市内の小規模高校として、自分たちにできることを模索する日々だが、生徒たちの笑顔はキラキラしている。



「努力は人を裏切らない…」

入来小(北) 永田 昇

二十年ほど前に鹿児島市内の小学校へ赴任した時のことである。赴任最初の担当学年が六年生であった。離島からの赴任であり、鹿児島市内も初めてであり、期待と不安で胸はずませて始業式後の教室へ向かった。

一か月が過ぎた頃、学級内の雰囲気は普段と違った違和感のようなものを感じ始めた。無駄話が多くなり落ち着きがなくなり、授業に対する集中力も欠けてきたように思えた。さらに、頭痛や腹痛を訴えて保健室へ行く子供たちも多

くなってきた。担任としての自分の力量が及ばないことを感じてきた。昨年の学年の様子は、いじめや問題行動、不登校等もあり、荒れた時期もあったと聞いた。小学校の卒業という人生の大切な節目を迎える子供たちにこのままの一年間でよいのかと考え始め、何か一つこの学級での思い出となる大きな活動ができないものかと。

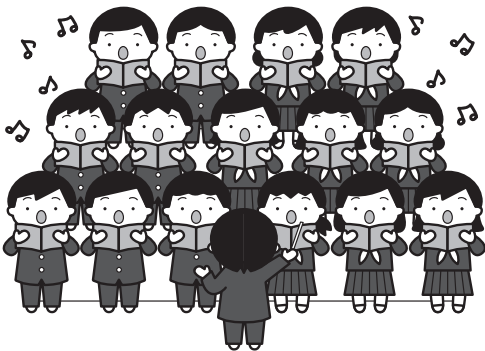
ある日、リーダー的存在の女子児童が「先生、小学校生活最後に市民文化ホールで合唱したい。」と。私はすぐには理解することはできなかったが2学期に校内合唱発表会があり、この発表会の結果次第で鹿児島市の合唱発表会へ学校代表で出場できることを知った。その女子児童はこれまで一度も学校代表に選ばれたことがないことを、そして、六年生が最後のチャンスであることを話してくれた。

合唱コンクールに向けて学級一つになって取り組もうと子供たちに提案した。「これまで三、四年生しか選ばれなかったし、やっとなって無理だ。」と、半数の児童が乗り気ではなかったが、その日以来、朝の会・帰りの会・昼休みや放課

後等、時間が許す限り練習に励んだ。その時、私が中学一年の時の担任の先生が言われたこれまで一番に心に残っている言葉を子供たちへ伝えた。

「努力は人を裏切らない」と。

校内合唱発表会の結果、学校代表に選ばれた。市民文化ホールの舞台袖で出番を待つ緊張した表情と、歌い終わった晴れ晴れした笑顔の表情を今も忘れることはできない。この教え子たちの「努力は人を裏切らない」というタイトルの卒業文集はどこへ赴任しても手元にあり、今でも私自身に対する応援文集になっている。



教頭先生も先生に…

田代小(隅) 田崎 武彦

平成二十五年四月、不安いっぱい、そしてかすかな希望を胸に、新任教頭として中種子町立岩岡小学校に赴任した。岩岡小学校は、南種子町との町境に位置し、学校の目の前に長浜海岸

があり、天気の良い日には屋久島、口永良部島、黒島、硫黄島を望むことができる風光明媚な所であった。学校は、児童数二十五名(他県から

の留学生が五名)で、完全複式の極小規模校であった。職員数も校長、教頭、教諭三名、養護

教諭、学校用務員の七名で非常に落ち着いた、穏やかな環境が築かれていた。そんな中、新任

教頭である私は、校長の指導を仰ぎながら、職員

の先頭に立って、学校のため、子供のため、地域のために力を尽くしていこうと粋がついて

た。(今、ふり返って見ると…)そして、職員一人一人との関わりを重視し、職員の良さや持ち味を引き出し、教育活動を活性化させることを望んでいた。そして、その成果なり変容なり

を急いで求め過ぎていたように思う。そのことから、職員への指導や助言が、自分が思い描く姿や形に思うようになっていかにいいことには

だちさえ覚えるようになった。職員への指導も

うまくいかな。私は、行き詰まりを感じると共に、この状況を職員の力不足と思うようになり、指導もおろそかになっていった。

そんな中、担当していた五年生三名(男子二名・女子一名)との理科の授業で、女の子がい

きなり、

「教頭先生、教頭先生の理科の授業、まあまあ分かりやすいよ。教頭先生も先生になればいいのに。」(教室中笑い)

そして、私はふと我に返り、子供にとっての先生は、担任であり、子供を直接指導する先生

であることを強く認識した。「担任、先生方を大事にしないとイケない。」と強く感じた、子供から教えられた今でも強烈に心に残るひとことである。この言葉を胸にこれからも職員と切磋琢磨していききたい。

『知・好・楽』

長田中(市) 末満 一二三

私が新採の時、生徒に社会科の授業に興味・関心をもたせることができずに悩んでいたことがあった。私は民間企業で八年間働き、三〇歳で教員になった。その頃の私は、やる気に満ち溢れ教壇に立っていた。しかし、生徒が主体的

でかつ積極的に活動するような社会科の授業にならず、悩んでいた。

そんな時、先輩の先生にいただいた「知・好・楽」という言葉である。「何事をやるにしても、知っているだけの人より好きである人が勝っており、更に好きだけの人より楽しむ人が勝っている。つまり、何事も楽しんでやる人には、かなわない」という教えである。

その先輩は、「最初から仕事があまくは

ずはない。いろいろな経験をして、初めて先が見通せたり、より良い方法が見えてきたりするものである」ともおっしゃっていた。仕事についていえば、まず仕事が好きになることである。

好きになって楽しくなれば、自然とたくさん仕事をするようになるし、たくさん仕事をすれば上達もしてくる。

また、先生が授業を楽しまなければ、生徒が楽しく授業を学べるはずはない。先生が知識を教え込もうとすれば、するほど生徒は遠ざかる。生徒に、教科のことや先生のことを好きにさせることはもとより、先生自身が楽しみながら授業を展開していけば、生徒に自然とその教科の面白さや内容が伝わり、楽しく授業を受けられるようになることを学んだ。

つまり、自分のやる気やイメージだけで授業を展開するのではなく教師自身も楽しみながら仕事をする（授業に臨む）ことの大切さを学んだ。

その先輩の教えがあったから、今の自分自身の教育観が作り上げられたと感じている。



「生徒は己の影と知れ」

国分中央高 伊地知 健 三

教師になりたての頃、自身も競技経験のある部活動の顧問を務めていた。熱心に指導していたつもりだがなかなかうまくならない、試合をしても勝てない。そんな期間が二年も続くうちに、思いどおりにならないもどかしさと焦りで頭の中がいっぱいになっていた。

とある練習試合の際に、他校の監督の先生方と話をしている中で、勝てない不満を私が口にしていたとき、指導力に定評がある先輩の監督が、題にある言葉を静かに口にされたのだ。

言われた言葉の意味を考えているうちにはつとさせられた。ちゃんと教えているのになぜできないのか。知らず知らずのうちに、原因は教えたとおりにできない生徒にあると私は思い込んでいた。先輩の監督は、教えたことができない、勝てないのは生徒に原因があるからではないよ。生徒はあなたの指導したとおりに動いている「影」なんだよ、と伝えたかったのだ。

思い返してみると普段の練習の中で生徒が質問に来た記憶がない。おそらく聞きに行く雰囲気さえも作れていなかったのだろう。

翌日の練習の中で質問を受ける時間を設定した。ある生徒が「先生の言っていることは言葉では分かるけど、実際に試合の中ではどう動けばいいか分からなくなる」と言った。その発言を受けて、ほかの何人もの生徒たちからも同様の意見が出された。基本の動きは教えたが、試合の場面ごとに異なる細かい動きを教えていなかったことに改めて気付かされた。

部活動に限らず、教科指導や学級経営でも、思いどおりに運ばないとき、この言葉があの日の先輩監督の顔とともに脳裏に浮かぶようになった。自分の指導の在り方を静かに振り返ってみると、改善のヒントに気付かされることがたびたびあった。

早いもので教職に就いて二十七年が経った。ものごとに行き詰まると、今もこの言葉が頭に浮かぶ。教育に携わる者として、これからもこの言葉を座右に置いて生徒と接していきたい。

ある日の校長講話



阿蘇の風の丘美術館を訪ねて

高尾野小(北)長 吉 昭 典

以前、阿蘇山に家族で旅行に出かけました。途中、「風の丘美術館」という看板が目に見え、飛び込んだので、美術館に入ってみました。

すると、そこには柔らかい優しいタッチで描かれた詩とイラストのがき絵がありました。家族みんな一つ一つのがき絵をくいるように見ていました。その時、娘が「お父さん・。」と小声で言いました。そこには、作者の大野勝彦さんが両手両義手ではがき絵を描いていました。

大野勝彦さんは農作業を終え、トラクターを

洗っているときに誤ってシャフトに両腕が巻き込まれ、両腕を失ってしまいました。完全に絶望の淵に突き落とされましたが、事故からわずか三日後に肘に筆ペンをくくりつけてはがき絵を描き始めました。

大野さんには三人の子どもがおり、お見舞いに来て病室に入る前に、「お父さんに心配をかけちゃいけない。みんな楽しんで話だけをしようね。」と。それを知った大野さんは、涙があふれ、止まりませんでした。大野さんは今回の事故で人間にとつて最も大切なものを教えられたそうです。それは、「笑顔と優しさ」「感謝の気持ち」「家族愛」です。

大野さんは、ある人から、「両腕を無くして、死にたいと思ったことはありませんでしたか。」と質問されたそうです。この質問に大野さんは「何と答えたと思いますか?大野さんの答えは、「両腕をなくして、(?)と思うようになりました。」ということでした。()の中には、「(よかった)と思いました。」だそうです。びっくりですね。さらに、「(?)」とも応えています。それは「もっと早く手をなくせばよかった。」とも言っています。

みなさんもおうちの人や周りの人たちへの「感謝の気持ち」や「笑顔と優しさ」「家族愛」

を持ち、さらには大野さんのように「どんな困難にも負けない強い心」を持つてほしいと思います。

学校保健委員会あいさつ

奄美小(大)中 村 勝

保護者の皆さんこんにちは。一学期ももうすぐ終わろうとしています。今年度も新型コロナウイルスによる制限が続いていますが、子供たちは、学習や運動にしっかりと取り組んでいます。また、マスク着用も自分でしっかりと考えて着脱を行ってくれています。さて、学校保健委員会では、いつも最初に目的について確認しています。「児童の健康の保持増進を総合的に進めるために、組織的に推進する必要がある。」となっていますので、よろしく願います。

一つ、私からお願したいことは、子供たちが成長ホルモンの恩恵に与ることができるようにしたいということです。私自身の子育ての反省も含めて、子供たちのしっかりとした成長のために睡眠も大切にされてください。

今日はちようど、三年生が郷土の学習で新民謡の先生をお招きして奄美の歌について学習していました。先ほど進行の先生が、肩の力を抜いて、子供たちの様子について意見交換しましたとありました。私も新民謡を歌ってみましたくなりしたので「島のブルース」を肩の力を抜いて歌ってみました。

一 奄美懐かあしや ソテツの陰で

泣けば揺れます サネン花よ

長い黒髪 島娘 島娘よ

二 かなは今頃 起きてか寝てか

寂しがるせる 浜千鳥よ

はえの吹く夜は 眠られぬ 眠られぬよ

三 夏の踊りは 七日と七夜

みんな知りしよる 月の夜よ

名瀬の港の船が出る 船が出るよ

島のブルースを聞くと、いろいろな場面が思い浮かんできます。高校、大学と定期船で行き来したことなどです。子供たちは、高校や大学になると、何らかの形で奄美を離れます。その時に子供たちが十分な力を発揮できるように子育てにしっかりと取り組んでいきましょう。今日はよろしくお願ひします。

チーム内之浦で頑張るとは

内之浦中(隅) 岩 元 邦 俊

皆さんは、「チーム○○」って聞いたことがありますか？私は、この言葉を聞くと、本当のチーム力ってどういうものかと考えます。単にみんなで仲良く取り組むことだと思っていないかと。例えば、一人で十時間掛かる仕事を十人で取り掛かると、単純に十人で一時間と考えますが、私はこれなら一人で十時間仕事をします。十人で取り掛かるなら五十分で終わるなど少しでも一人当たりの時間を短縮できるチーム力が本物ではないかと考えます。

あるドラマで、バスケットボールチームでワンマンプレーをする主人公が周りからいろいろ言われ、仕方なくチームプレーをした時、キャプテンがこれは私たちが目指しているチームではない。各個人が自分のよさを生かし、チームとしてベストパフォーマンスできることが大事だと。個を殺してまでチームプレーに徹することとはチームにとってよくないと。私も一人一人が生かされ、なおかつチームとして頑張れることが一番だと考えます。

私が好きな言葉に「和でなくて積」という言

葉があります。これは、第一次南極越冬隊長の西堀栄三郎氏の言葉で、「同じ性格の人たちが一致団結しても、その力は和の形でしか増やせない。異なる性格の人たちが団結すれば積の形で大きくなる。」という意味です。

二期は、運動会や学習発表会など、みんな協力して取り組まないといけません。しかし、一人の考えで全てが進んでいては意味がありません。全校生徒一人一人が一生懸命知恵を出し、考え、合意形成して全力で取り組んでほしいです。時には考えの違いやトラブルもあると思いますが、自分の考えをしっかりと出し、相手の意見をきっちり聞き、お互い納得できて初めてみんなで同じ方向に向かって取り組めます。そうすることで、きつと達成感・充実感・感動をしたり、与えたりできると思います。是非チーム内之浦の力を見せてほしいです。



話のひろば



「ふるさとを思い出す鍵」

被川小（隅）
西別府 龍 一

現在勤務している学校は創立一四四周年目の歴史ある学校である。数年前、学校のシンボルとして、校庭の真ん中で何十年もの間子どもたちを見守っていたセンダンの木が台風で倒れてしまった。その時は地域をあげて復旧作業が行われ、倒れたセンダンの木の記憶を後世に残すためのモニュメント等の作成が行われたと伝え聞く。推測の域は出ないが、センダンの木は、卒業生や地域の方々にとって、母校やふるさと被川を思い出す「鍵」のような存在だったのではないかと考える。

さて以前勤務していた創立四〇年を迎えた学校での話である。この学校は、昭和五〇年代後半に丘陵地を切り開いてできたニュータウンの中の学校であった。教育課程の中には、地域芸

能伝承活動として「棒踊り」が位置づけられていた。地域には保存会が存在し、子どもたちへの指導を行うなど積極的な協力をいただいていた。運動会で披露される五年生六年生、百数十名の演技する棒踊りはとても勇壮で、子どもたちの中でも、高学年で棒踊りを披露することが一種のステータスになっていた。そんな中、地域の懇親会の際、保存会の方から、この棒踊りにかける熱い思いを聞くことができた。「このニュータウンは、様々な場所から移住してきた人たちの集まりである。しかし、ここで生まれ育った子どもたちは、この地がふるさとなる。子どもたちがふるさとを語るとき、何もなければさみしい。子どもたちにふるさとの思い出を何か残してあげたい。だからここで一番歴史のある棒踊りを子どもたちに伝えてあげたい。」と語ってくれた。私は、とても感銘を受けた。そして、まだまだ歴史の浅い学校ではあるが、十年後、二十年後、この棒踊りの体験が、ここを巣立っていった子どもたちがふるさとを思い出す「鍵」となることを期待して、この伝承活動を続けていきたいと思った。

現在勤務している被川小学校でも八月踊りや棒踊りを運動会で披露している。地域の方々も熱心に指導を手伝っていただいている。その方々も以前勤務していた学校の地域の方々と同

果樹の世話

頴娃中（南）
橋野 三智男

じように熱い思いを持たれている。学校のシンボルであったセンダンの木はもうない。しかし形はなくても、このような日々の学校生活の中で、子どもたちの思い出の中に、ふるさとを思い出す一人一人の「鍵」ができてくるのではないかと思う。

「趣味は何ですか。」とたまに聞かれることがある。知り合いの中には、一つの趣味を極め、人はだしの域に達している友人も数多くいる。新型コロナウイルス感染症が拡大し始めた頃から、新しい趣味が増えた。それは、義母宅の畑に植えてある果樹の世話である。その畑には、紅甘夏・たんかん・すもも・柿・レモンが植えてある。元々義母が、義父が亡くなった後にその寂しさを紛らわすために植えたものであったが、加齢による体力的な衰えもあり、近年は専ら、畑の世話は私の担当となっていた。世話といっても、草刈り程度のもので、樹木の剪定や肥料等の世話をするわけでもなく、当然、その程度の世話で収穫される成果は推して知るべし

であった。

ある時、草刈りのついでに、果樹の剪定を試みることになった。義母が大事に育てている樹木である。素人当然の私が考えもなく剪定したのでは、今まで自然の力で成っていたわずかばかりの収穫物が台無しになってしまう可能性もある。本屋へ走り、剪定の仕方や肥料のやり方を調べた。時には、スマホ片手に、草刈り作業をしながら調べたこともあった。剪定すべき枝と残すべき枝の区別、季節毎に与える肥料の種類等、調べれば調べるほど、作業の奥深さに驚嘆し、改めて、果樹専門農家の方の苦勞を多少なりとも理解できた時間でもあった。そんな私の姿を傍から見ている義母は、私が世話をしに行く度に、「形になってきたが。」と褒めてくれた。

剪定や追肥作業をしながら、ふと自分のこれまでの仕事を振り返ることがある。子供が持つ可能性の枝(芽)を切ることはなかったか、与えるべき時に与えるべき肥料(称賛の声)を与えたか、理想ばかりを追い求め、自分の怠慢さを反省するばかりである。子供たちだけでなく、職員に対してもしかりである。教職のゴールも近づいてきた。しかし、まだまだやるべき作業は山ほどある。校長自ら汗を流し、「チーム学校」という大きな収穫物を獲るまでは頑張らなければ

ばならない。ところで、丹精込めて世話した果樹は、期待以上の成果を出し、職員にまで振舞うことができたことは予想外であった。



野球的思考から

米ノ津中(北)

関戸達哉

校長職を拝命し四年目となるが、難しい局面で指示や判断に迷うことが日々ある。そのようなとき

には、小学生からやってきた野球をもとに、野球的思考を生かして考えるようにしている。以下はその一例である。

※「2割6分、2割8分、3割のバッター」(打率2割6分では解雇、2割8分では数年活躍、3割では一流と言われるプロの世界。ただその差は50打席に1回の結果の違いである。)

→小さなことにこだわるのが大切。

※「ピンチのあとにはチャンスあり」

→学校に課題があり困難なときこそ課題の解決を通して職員の力量は高まり学校は良くなっていく。逆に、状態が安定しているにもかかわらず、やるべきことができなくなったり、つまりチャンスを逃したときは要注意。

※「惜しくてもやりきらなければ何も残らない」

(野球には曖昧な結果や引き分けはない)

→中途半端な努力や取組は結果に繋がらず評価は得られない。結果は過程よりも大切である。

これらの言葉は、すべて私が野球の指導を受ける中で教えていただいた言葉である。これらの言葉は単に野球にとどまらず、教育の世界や人材育成にも通じる場所があると感ずる。

これまで、教師として、また野球の選手や指導者として多くの貴重な経験をさせていただいた。周りに恵まれ、野球やソフトボールの選手として国体に七回出場させてもらったり、指導者として県大会で優勝させていただいたりした。心から感謝の気持ちでいっぱいである。

力のない私が何とかこれまで教師としてやってこれたのは、野球というすばらしいスポーツに導き指導してくれた両親、一緒に汗を流し支え合った仲間たち、そして教師としてあるべき姿を教えてくださいくださった上司、先輩、同僚の先生方のおかげである。

変化の激しい社会の中において、課題が山積する教育界ではあるが、これからも本県教育の振興のため、「子どもに力を付ける」という軸をぶれさせることなく自分なりに努力していくと思う。

読書案内



■小宮 昇 著

「プロカウンセラーが教える はじめての傾聴術」

前之浜小(市)上 西 由美子

「信頼されるのは、話し上手よりも聞き上手である。」「傾聴は人間関係を育てる。」と、心理学博士・臨床心理士である著者は述べている。相手の気持ちを理解しようとしている誠意が伝わると、それだけで人との関係がよくなる。そして、傾聴を通して、人の気持ちや考えなどを理解できるようになるため、人としてより豊かになったと感じられるようになるということだ。

本書は、傾聴の基本・実践的技法や傾聴にお

ける心の変化等を、心理学をベースにしてデータや図・イラストを用いて具体的に分かりやすく記してある。事例の応答例も掲載しており、実際の児童生徒理解や保護者への対応、教職員との関わりなどに大いに生かせる内容である。

傾聴の基本は、話し相手に興味をもち、相手が伝えようとしていることを理解しようと積極的な態度で耳を傾けることである。自分の意見はひとまず横に置いて、相手の話を受容的・共感的に聴く、自分の話はしないということなどが書かれてある。しかし、上手にテクニックを使えば傾聴できるというものではなく、大切なことは、話し相手をありのまま尊重し、共感的に理解することであるとしている。

傾聴はクレーム対応にも力を発揮する。「クレームを受けた時の接遇態度の調査」によると、謝罪や説明・説得よりも傾聴が最も問題解決に効果があったそうだ。クレームを言う側には、問題を解決したいという実利面だけではなく、不満を解消したい、尊重されたいという心理が働いていることもある。その場合は、気持ちを受け止めずに、どんな正論を並べてみても、問題はなかなか解決に向かわない。人の心はいつても常識や良識にかなっていないとは限らないということである。

人は、人間関係に傷付き、人間関係で癒やさ

れるという。傾聴スキルと共感力を高め、よりよい人間関係を構築するためのヒントになる一冊である。

ナツメ社 一四〇〇円

■オルト・ドーナト 著／鹿田昌美 訳

母親になって後悔してる

神山小(熊)山口 和代

書名を見て驚いた方もいることだろう。イスラエルの社会学者・社会活動家であるオルト・ドーナト氏が母になったことを後悔する女性が異常な少数例ではないと示すことで、女性に備わるとされる「母性」が単なる神話であること、を暴き、女性たちを画一的な母へと誘導する、社会の「見えない規範」を明るみに出そうとしたものである。「もし時間を巻き戻したら、あなたは再び母になることを選ぶか?」という質問に「ノー」と答えた23人の女性にインタビューし、今まで口をつぐまざるを得なかった女性たちの想いに迫っている。母になったことを後悔しているという理由が一樣ではないことに対

して、母になった後悔と子どもへの愛情は別ものと全員断言しており、「母となった後悔」は「子どもを愛していない」とイコールではないこと、「後悔は母になったこと」であり「子どもがこの世に存在することではない」というように明確に区別しているのだ。このことは、子どもを生きる権利を持つ独立した別の人間と位置付けていることを示唆している。同時に彼女たちは、子どもの母になったことと、その人生に責任を持つことに後悔を感じているのだ。「どうしても母親になりたい」という女性がいる一方で、キャリアや仕事といった大義名分がなくとも、「自分の時間が持たたい」「自由に生きたい」などといった理由から「母になりたくない」女性も存在する。彼女たちを非難せず、「認めること」が多様な社会への第一歩なのではないだろうか。

私たち教育者は、男女の区別も感じながらもその中の多様性にも注目していかなければならない。女性活躍と言われる一方、母親としての役割の重さは引き受け続け、女性が母になることと、自分の人生を生きようというこの間をつじつまが合わない人がいるということ念頭に置いて教育を行っていく必要があるのだ。是非一読していただきたい。

新潮社 二〇〇〇円(税抜き)

■西岡常一(天)

小川三夫(地)

塩野米松(人) 著

木のいのち 木のこころ

天・地・人

羽島中(鹿) 高 田 百香里

著者の西岡常一氏は法隆寺金堂の復興を果たした最後の宮大工と呼ばれた方であり、中学校国語教材「法隆寺を支えた木」の著者としても知られている。この西岡氏の唯一の内弟子、小川三夫氏の講演を聞く機会があり、そのお話しに甚く感銘を受け、小川氏が師事した西岡棟梁の教えについてぜひ学びたいと思い、この本を手にした。

西岡氏は言う。「人はみんな個性があつてそれぞれ違う。(人と同じで)木は立っているとさも違いますが材にしても違いますのや。日ごろは個性ということをやかましゅう言うくせに一番大事な教育ということになりましたら、このことを忘れてしまいます。(中略)今の教育では網の目を通してみんな同じものにしようとしています。そのほうが楽ですわな。ですが、

それじゃ個性を伸ばすことはできません。一番個性を無視したやり方です。」千年を越えて建つ法隆寺金堂を支える木、その一本一本の性質を考え適材適所、組み合わせを考えてそれぞれの木が生かされるように建てていく。学校に置き換えれば職員指導然り、生徒一人一人の個性に応じた「個別最適な学び」然り、学校を取り巻く様々な課題対応に当てはめて考えることができるのではないだろうか。

学校現場は今、societyの到来に「GIGAスクール構想」一人一台端末、さらにはコロナという未曾有の事態への対応にも迫られる状況下にあり、課題が山積である。そんな中、「ものづくり」職人の方々の数十年にもわたる学習過程は徒弟制度という古くからの伝統の中で培われており、今までの学校教育にはないものであるが故に学ぶべきところは大きい。

激しく変化する社会でチャンスとリスクを見抜き、希望をもって前向きに自己実現に取り組む生徒、たくましく生き抜く生徒を育てるために、今学校教育は大きな転換を求められている。このような厳しい状況の中の学校経営を考えると、非常に参考となる一冊であり、人間の生き方を示す手本となる一冊である。

新潮文庫 九五〇円

今回有難いことに、「趣味・文芸」の項を執筆する機会を与えていただいた。しかし、これまで幾度となく先輩諸氏から「趣味を持つように」と、言われてきたものの、これといった趣味を持つまでには至らなかった。

振り返ってみると、これまで心が躍るような趣味の前段階の体験は少なからずあった。赴任先で同僚や先輩、保護者や地域の方とのかけがえのない出会いもあり、その中で誘われるがままに教えていただいた貴重な体験をその後、少しでも継続し、趣味にしておけば良かった、今になって大変後悔している。

そこで、もう一つの『文芸』ということに視点を当て、国語を通して考えてきたことを雑感という形でまとめさせていただきたい。

私は、小学生の時分から国語が好きだ。国語の中でも特に、文学作品を読むことが好きで、新しい教科書をもたらした時は、まずは、文学作品から先に読んだものだ。毎朝登校前にそのころ生活していた集合住宅のベランダに立って、音読してから登校した。そのうちに、当時教科書に掲載されていた『モチモチの木』や『太郎こおろぎ』、『石うすの歌』などの文学作品を暗唱することができた。『モチモチの木』を暗唱で通読発表できたときの同級生からの拍手は今でも忘れられない。「読書百遍意自ずから通ず」とはよく言ったもので、国語の時間は正解ではなかったと思うが、よく手を挙げて発表したものだ。

その後、大学生となり国語科教育法の講義の

趣味・文芸

意味構造表から紐解く文学作品

吉田小(市) 有村 恵

中で、蓑手重則先生が著した『国語教育言論』の意味構造表を学んだ。意味構造表は構成、叙述、意味構造の欄から成り、意味構造の欄はさらに叙述的意味、表現的意味、象徴的意味に分かれている。学んだ後のレポートの課題は『スィミー』だった。この作品は、小学二年生以来の懐かしい作品でもあったが、意味構造表という形でレポートを書くとなると以前にも増して新鮮に思えた。提出後の評価は表紙に「これだけ丁寧に読み取れていればよいです。ただし象徴的意味の取り方には注意してください。」と朱書され、評価が書かれたレポートを教官から大講義室で名前を呼ばれ、直接渡していただ

ある。また、作品の中には、題名にもなっている「白いほうし」に、赤い刺繍糸で持ち主の名前が「たけのたけお」と縫い付けてある。これは、白と赤のコントラストであり、鮮やかな色が目に浮かぶ。最後の場面で、主人公の松井さんが野原で聞いた声は、「シャボン玉のはじけるような小さな、小さな声」であり、かすかな声を「シャボン玉がはじける」という比喩で表現している。

次に、『わらぐつの中の神様』には、作品構成のおもしろさがある。マサエは、わらぐつのことを快く思っていないが、わらぐつの中に神様がいるという祖母の言葉に興味を持つ。

そして、大工さんとおみつさんの会話のやり取りの中に、大工さんの仕事に対する思いが込められている。これは、主題につながる会話でもあり、併せて題名とも呼応する。実はこの大工

いた。ここで国語の教材分析の仕方をじっくりと学んだと思う。卒業後、小学校の教壇に立つようになってからは教材研究として、意味構造表の作成を続けた。なかなか時間を要することではあったが、不思議と苦にはならなかった。それは、この過程を通すことでこれまで気付かなかったことに気付くことができたからではないか。

例えば、『白いほうし』は、「これは、レモンのおいですか。」で始まる。そして、最後は、「車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいが残っています。」で終わる。これは、書き出しと結びの呼応であり、余韻を残す終わり方でも

国語は教材文のみが教科書に掲載されている。そしてその教材文をどう指導していくかは各々の指導者に委ねられている。国語の指導の醍醐味はまさにここにあると言っても過言ではない。国語の授業は十人十色である。だから国語は、実におもしろい。

郷土の紹介



油井の豊年踊りと学校

油井小中(大) 川畑 真 英

一 油井小中学校の概要

令和四年度の全校児童生徒数は、八人(小学生五人、中学生三人・小中併設)の極小規模校である。

「礼儀正しく 花いっぱい」の 社会に貢献できる 油井小中」をキャッチフレーズに、地域のサポートをふんだんに受けて教育活動を進めている。

校区は、油井・久根津・阿鉄・小名瀬の集落から構成されている。

二 豊年祭とサーテンテンテナ シトルク テンテン…

六月から油井の豊年祭に向けて、三味線と島唄を中心とする練習が始まっている。地域の演者、唄者のお師匠さんが、週に一回の手ほどきに來られる。「姿勢は正しく」「寝かさず少し立たせて」とまるで六調のようにリズムカルに教えていただいている。それに応えようと子どもたちも真剣な様子である。

「油井の豊年踊り」は、一九八三年に県指定無形民俗文化財に指定され、毎年旧暦の八月十五日に行われる豊年祭で披露される。

様々な笑みを浮かべた表情の紙面を付け、稲作を主題とした演目がユーモラスかつ神事的に演じられる。豊年を神に感謝するとともに、更なる豊年を祈願する古式豊かな伝統芸能である。



上の様子は、最初の演目「綱切り」の様子である。力士を中心に集落民が東西に分かれて綱を引き合う。大綱は計三回切られ、二回つなぎ直され、最後に切った綱の片方は、土俵に運ばれ、俵として埋められる。三度も現れて綱を切るのは、実は、「シシ」なのである。

油井の豊年祭では、大綱や土俵の俵として「稲わら」が欠かせない。集落と子どもたちが稲作活動をしているのは、「油井豊年踊り」で稲わらを使用するためである。

今年を含めた三か年は、新型コロナウイルス感染症の影響で祭りの開催が見送られた。しかしながら、子どもたちは、学習発表会や

町島口・伝統芸能大会などで演目を披露することになっている。豊年踊りへの燃えたる思いを表現してくれると確信している。

三 郷土の様子

校区が面する海は、大島海峡のほぼ中央に位置している。波が穏やかで朝風夕風の景色はまるで時が止まっているかのように美しい。沖合に浮かぶ「油井小島」は、珊瑚礁に囲まれ、更に南に加計呂麻島を望むことができる。

学校の背後には、瀬戸内町で最も高い山である油井岳(標高四八三m)が控えている。二か所の展望台から見渡す大島海峡の景観は圧巻である。この山地一帯は、貴重な生き物や植物を生むエリアで、国立公園の特別保護地区、第一種及び第二種特別地域域の範囲内となっている。

四 本校の教育活動

このように大きな自然と素晴らしい景観とともに本校は教育活動を進めている。シーカヤックやヨット体験もその一つである。

また、三味線教室や運動会にも卒業した高校生が顔を出してくれている。

これからも、豊年踊りを中心に、郷土の自然が支える歴史と文化が、子どもたちを後押ししていく。



「ありがとう」は信頼を 深める幸せの 一歩である。

周りの人にたくさん
お世話になっている。
感謝の気持ちを
常に伝えたい。



菜の花と開聞岳

© K.P.V.B



提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和四年十月一日付

龍郷町 碓山和宏氏

○再任 令和四年十月一日付

大和村 晨原弘久氏

○再任 令和四年十月一日付

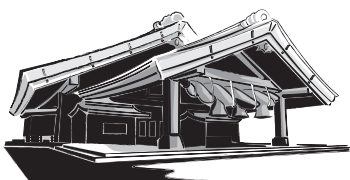
宇検村 村野巳代治氏

季節の言葉 「神無月」 かななづき

空狭き 都に住むや 神無月 夏目漱石

日本中の神々が出雲の地に集まることから「神がない月」として神無月と呼ばれたという説があります。

一方、たくさんの神様が集まる出雲では、この月を「神在月（かみありづき）」と言って、さまざまな行事で神様を迎えます。



編集

後記



毎朝校門前で、「おはようございます。」と挨拶をしながら子供たちを迎えていると、元氣な挨拶を返してくれる子、こちらが挨拶をする前に「校長先生おはようございます。」と笑顔で挨拶をしてくれる子、返事を返してくれない子と、子供たちの反応は様々です。しかし、ある日通学路の途中にある交差点へと場所を移動して子供たちの様子を見てみると、校門前では元氣な挨拶をしていない子が、横断歩道の前で止まってくれた車に、頭を下げて「ありがとうございました。」と大きな声でお礼を言っている姿を見ました。「こんな一面があるんだ。」という驚きや嬉しさを感じました。

それと同時に、子供たちのよさをしっかりと把握するために、子供たちの様々な情報を収集する努力をすることの大切さを今更ながら感じました。また、今自分が持っている情報だけで判断することがどれほど危険であるかを痛感しました。

今年度から県広報常任部会で、月刊「鹿児島教育」の発行に向けた作業に携わる機会をいただきました。毎月、自分も実践してみたいと思える情報や、学校経営の中で校長判断をする際のヒントとなる情報をいただけることに、心から感謝しております。

今後、月刊「鹿児島教育」から多くの情報を得て学んでいきたいと思っております。最後になりましたが、今月もご多用の折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に厚く御礼申し上げます。

西紫原小学校 平川了二